

## 第7部 (2) 相次ぐ不手際 疑念に拍車

先生、山さ逃げようー。

東日本大震災当日の石巻市大川小で、男子児童が裏山への避難を訴えたという証言。校庭で待機させられた子どもたちの危機感を象徴する証言の扱いが、市教委の事後対応のまずさを際立たせた。



市教委の聞き取り記録。被災後、一緒に行動したとはいえ、児童2人の証言がほぼ同じ表現になっている。黒塗りは非開示部分（写真の一部を加工しています）

発端は2011年6月の第2回説明会だった。

市教委は「（防災行政無線を聞いて）『こっこって海岸沿いな』という女子、『山さ逃げよう』という男子がいた」と説明した。

ところが12年3月の第4回説明会では「（証言の）事実を押さえていない」と否定した。同8月の第6回説明会では「遺族から伝え聞いた話を基に説明したと考えられる」と釈明した。

遺族によると、証言は「先生、山さ逃げよう。ここさいと死ぬから」。校庭でやりとりを見聞きし、証言したとされる児童に11年4月と11月、直接、発言内容を確認したという。

一方、この児童は同5月、河北新報社の取材に「男子から『（山に）上りましょう』とかの話はなかったと思う」と話した。今回、再取材を試みたが、接触できなかった。

初期の証言に関する市教委の説明が二転三転し、遺族は「意図的に児童の証言を隠したのではないか」との疑念を抱いた。

同8月には市教委が男性教務主任（57）や生存児童らに聞き取りした際のメモを廃棄したことが、河北新報社の報道で発覚。当時の指導主事加藤茂実氏は「メモの中身は（聞き取りを記録した）報告書に全て盛り込んだ」と弁明したが、「都合の悪い事実を消し去った」と強い批判を浴びた。

報告書自体、コピー&ペーストをしたかのような文面があった。5年の男子児童2人の「被災後の行動」の項目は、6文中4文が句読点も含め全く同じだった。

6年の長男大輔君＝当時（12）＝を亡くした今野浩行さん（56）は「別々の児童が判で押したように同じ回答で、あまりにも不自然」と指摘する。

12年8月の第6回説明会では、当時の学校教育課長山田元郎氏が、遺族の追及を受ける加藤氏に向け、口に指を当てて合図する様子が遺族が撮影したビデオに映っていた。市教委の姿勢を象徴するシーンとして、遺族の脳裏に刻まれた。

「なぜ子どもたちは、学校で亡くならなければならなかったのか」

6年の次女みずほさん＝同（12）＝を亡くした佐藤敏郎さん（54）宅に週1、2回集まり、情報交換する遺族のグループが自然発生的に生まれた。

佐藤さんらは独自に「空白の50分」を検証した。児童や保護者、地域住民らの証言を集め、情報公開請求も駆使。あの日の校庭には津波から逃げるための「時間」「情報」「手段」があったとの確信に至る。避難場所を決めていなかったことなど、危機管理マニュアルの不備は遺族の追及で明らかになった。

第2回説明会前日の11年6月3日、教務主任は遺族宛てにファクスを送っていたが、当初開催予定がなかった7カ月後の第3回説明会まで公表されなかった。

佐藤さんは「市教委が言うように『先生が力を振り絞って書いた手紙』だとすれば、あまりにずさんな扱いだ。ファクスの存在を永遠に隠すつもりだったのではないか」といぶかる。

対応に当たった加藤、山田両氏は係争中を理由に取材に応じていない。